

早稲田大学 人間科学部 古典 講評

〔総合分析〕

| |
|--|
| <p>試験時間</p> <p>国語 90 分（現代文 2 問 古漢融合 1 問）</p> <p>出典</p> <p>『太平記（たいへいき）』 卷第十八 春宮還御事 付一宮御息所事 （一部）</p> <p>解題</p> <p>軍記物語。南北朝機の成立(1370 年代に現存形態に近い本が成立したと見られる)。小島法師の作か。四十卷。鎌倉時代末期から建武新政期を経て南北朝の騒乱期に至る四十年に及ぶ動乱の時代を描いた作品。</p> |
|--|

〔大問別講評〕

| 大問番号 | 設問番号 | コメント | 難易度 |
|------|------|---|-----|
| 三 | 問十三 | <p>〈文学史・常識〉</p> <p>文学史と古典常識を併せた些か出題方法にひねりのある設問だが、在原業平の一代記である歌物語が『伊勢物語』であることは文学史の基本知識。地名の伊勢が現在の三重県であることも常識。</p> | やや易 |
| | 問十四 | <p>〈和歌の修辞〉</p> <p>掛詞を含む句を選ぶ設問。いくら数多くの掛詞を知識として蓄えてもおそらく対応しきれないものであろう。知識主義を斥して柔軟な判断力を身に付ける対策を立てたい。和歌の解釈としての句点を付けることは大前提。この和歌は「うけむ」で区切れ、第三句以降と倒置になり、第五句の「深き思ひを」は「うけむ」に懸かる。すると「影を」を受ける動詞がないと考え、「御手洗川」に何か鍵があると見抜きたい。「御手洗川」の「み」が「見」の意味を掛け「影を」を受ける。</p> | やや難 |
| | 問十五 | <p>〈傍線部訳〉</p> <p>例年通りの設問形式。傍線部 C・F は、鍵となる語彙を精確に判断し解釈すれば、選択肢に些かの意識がなされているものの正解を得られるであろう。H は傍線部の正確な解釈と文脈を捉える判断力が求められる。</p> <p>C・基本語である「あてやか」によって選択しようとして戸惑うかもしれないが、「かなしみて」をも考慮すれば判断しやすい。</p> | 平易 |

| | | |
|-----|---|-------------------|
| | <p>F・補われた主語の判断と、基本語の「あくがる」の解釈が鍵。</p> <p>H・傍線部の前の「夜も更け、はや人静まりければ」との因果関係から「牛がいなくなつて」や「手紙を…送る用意」を消去し、選択肢・八は疑問文である点から消去できる。</p> | <p>平易 やや易</p> |
| 問十六 | <p>〈漢文・返点〉</p> <p>漢文が古文の一部に含まれる形態は4年連続の出題、定番となった感がある。02年・03年が返点を伏す設問、昨年04年は空欄を埋める設問であった。引用の漢文は「白氏文集」巻三・新楽譜・五絃弾の詩の一部であることは設問の中に示されており、七言の市の一部であることも一見して気付く。漢文の基本構成と漢詩の造句法を考慮して判断する。引用された漢文は「鉄、珊瑚ヲ撃ツ、一両曲、氷、玉盤ニ写ル、千万声」と訓む。</p> | 標準 |
| 問十七 | <p>〈解釈〉</p> <p>村正にたとえられた意味を読み取らせる設問。傍線部に続く「御袖もしほるる」をヒントにすれば、「涙」を暗示することに気付くであろう。古文の読解の基本知識。</p> | 標準 |
| 問十八 | <p>〈本文補填・文法〉</p> <p>傍線部の末の係助詞「や」から判断して文末が連体形でないものは消去する。文末が連体形のものはい「あらむ」と二「あるまじき」であるが、打消しの内容では、宮が「立ちやすらはせたま」う行動とそぐわない。</p> | やや平易 |
| 問十九 | <p>〈常識〉</p> <p>本文の内容の時日を答えさせる設問。本文の中に季節や時候を示す語を検索してそこから判断する。何月かを判断する語はなく、七月か八月か九月か十月かを選択することはできない。陰暦の十六日以降に出る「有明の月」をヒントとし、下旬が選択の鍵となる。このような古文常識から本文を解釈する力を養っておきたい。</p> | 標準 |
| 問二十 | <p>〈内容一致〉</p> <p>昨年同様、本文の内容と合致しないものを選ぶ設問。短い選択肢が4つ、平易に見えるが、単純に本文記述と照らし合わせて合致しないものを選ぶのは至難。尊良親王は筑山の松の木陰の所まで、立ち入っていることから、「敷地内に立ち入らなかった」が誤り。築山は庭内に作られた小山。こうした知識も養っておきたい。</p> | やや難 |

〔総合コメント〕

難易度

標準（昨年並み）

分量

昨年に比べ増加。800字弱。但し、過去5年の人間科学部の出題としては平均的な長さ。01年度の『続古事記』750字、02年度の『十訓抄』860字、03年度の『春の深山路』950字に比べ、04年度の『なぐさみ草』550字であった。設問の数は昨年と同一。

出典

他の軍記物語に比べ出題頻度の高いものとは言えまいが、例年、大学入試で出題されるものである。本年2005年大学入試センター試験・国語Ⅰ・Ⅱ追試験の後半部分と同一箇所引用であった。

形式

すべて客観方式。平年の人間科学部の出題形式を超えるものではなかった。設問数も8題で、ここ数年変動はない。昨年に比べ、文法に関わる設問が1題となった。地名に関する知識を問う設問が昨年引き続き課され、本文の月日を問うなど知識を問う設問が多くなったと言える。すべて基本の域を出ない設問。